

八重の青春

講演	露口 卓也〔つゆぐち・たくや〕
講師紹介	同志社大学文学部教授
研究テーマ	近代日本文化史

「八重の青春」と題してお話をさせていただきます。紹介にありましたように文学部文化史学科の教員で、以前は同志社社史資料センター所長を務めておりましたので、NHK大河ドラマ「八重の桜」の企画が始まって、2年ほど前から忙しくなりました。もうじきドラマは終わりますが、当初は八重がどういう生涯を送ったのかほとんど知られておらず、その状況でしゃべっているときはよかったのですが、皆さんにもよく知られるようになったので、話しにくくはなりましたが、今日は「八重の青春」と題して八重の30歳ぐらいまでの話をさせていただきますことになろうかと思います。

会津戦争

慶応4年（1868年）、明治元年になりますが、8月23日から9月22日まで、会津の籠城戦がほぼ1カ月間にわたって戦われ、八重は城中で活躍することになります。会津戦争のことについてしゃべるだけでも時間をとるのですが、会津の悲劇、このときに、かなり死者が出ます。会津藩は慶応4年1月3日の鳥羽・伏見の戦いで負けます。江戸城が開城された4月の段階になると、もう新政府軍は圧倒の勢いです。どの藩もほとんど新政府軍についている状況のなかで、恭順の意を表したにもかかわらず、会津藩だけが許されないのです。新政府軍はぐんぐん東北に攻めてくる。会津は備えをしていかないといけない。この段階で劣勢は明らかでしたから、会津の人たちが危機感をもって臨んでいたことは確かです。会津の人たちは会津を中心とした地域で、いくつかの入り口に新政府軍がやってくるので、会津城下の武士たちは8月の段階で各方面の戦線に出ており、新潟も戦争状態になっている。では会津城下に残っているのは誰か。女、子どもと年寄りです。この人たちが残るのです。8月23日、会津藩も予想だにしない速さで新政府軍が一気に城下に押し寄せて来たため、殿様を守る少数の藩士はいるが、城下は大混乱を起こす。会津藩の悲劇とは何か。政府軍に攻め込まれたとき、ここにいる者たちは家族を単位に行動をとるのです。どのような行動をとるか、劣勢は明らかなので、敵軍が攻めてきたら皆、お城の中に入るように申し合わせているのです。小さな子どもから年寄りまで何かを決心しないといけないときには、家族単位で決めるのです。ある家族は城に入ろうと思ったが、城の門が早く閉じられた。入れないので敵軍が攻めてきたら深く家族単位で自決しようと決めていた。小さい子どもや赤ん坊でも一家で一つの行動をとる。そうすると死者の数が一気に増えていくのです。この戦争は、家族単位で一緒に動くことをよく示している戦いです。1カ月間、籠城し続けることができたのは驚異的ですが、周囲は全て敵です。どういう行動をとるにしろ家族単位ですから、家を背負って戦うから家を単位にしながら動き、行動を決めますので死者の数は自ずから増えます。入城するものと、郊外に逃げるものと、自決をするもの。ドラマでは西郷頼母という城代家老で石高のある上級武士の家族、縁戚が西郷邸で集団自決する場面がありました。皆一緒に亡くなっていくという、家族単位で多くの悲劇、悲惨さがあるわけです。

籠城戦の覚悟

このとき、山本家に残っていたのは、八重と母佐久、兄嫁うらとその子どもみねの4人です。母と兄嫁は、お城に入ったら足手まといになる、お城の食糧を無駄にすることになるから郊外に逃げようと言う。それに対して八重は断固として反対し、入城しようと主張して意見が割れるのですが、第三者が間に入って山本家は入城を決めました。そのとき、八重は鉄砲を担いで断髪にし、男の格好をして、戦士として入城することを早いうちから決心していたのでしょう。この女性の一つの特徴です。

彼女が城に入ったときのことを後年、回顧したものがあります。

入城のときの覚悟

それに、弟の三郎と申しますが、その春、山城国鳥羽の戦で討死しましたので、その形見として着物と袴がつきましたから、私は、弟の敵を取らねばならぬ、私は即ち三郎だといふ心持で、その形見の装束を着て、一は主君のため一は弟のため、命のかぎり戦ふ決心で、城に入りましたのでございます。

（「男装して会津城に入りたる当時の苦心」『婦人世界』実業之日本社 明治42年）

これはずいぶん後年、40年ぐらいたってからの談話です。こういう覚悟で彼女は入城する。戦士として決心して城に入った彼女は、女性としては特異であると思います。彼女の後年の回顧によると、城は包囲網が敷かれ、連日、城に弾が撃ち込まれていく。徐々に死者の数が累積していくなかで、会津若松城は1カ月間持ちこたえるということになるわけです。八重は後年言っていますが、生きるか死ぬかということはあまり考えなかったそうです。城を枕にというこの気持ちは、城に籠もった人たちは男だろうと女だろうと皆、覚悟したものだと思われるますが、八重は「大砲が落ちて来た時、恥ずかしい死に方だけはやめようと、これだけは避けたかった」と語っています。

経験から認識したこと

後年の回顧を読むと、三つぐらいのことが印象付けられます。一つ目は戦うこと、二つ目は籠城戦の経験から女性の力がどれほど大きいのか、彼女が認識を深めていったこと。三つ目は会津藩への忠誠、会津武士がもっている節義です。事件が起こったときに会津武士のモラルの高さを認識します。おおよそこの三つを認識いたします。

兄との再会

明治4年、八重と母の佐久と姪のみねの3人は京都にやって来ます。そして兄の覚馬と7年ぶりに再会いたします。この段階で八重は27歳になっています。これ以後、八重は88歳で亡くなるまで、京都で生活をします。このとき、覚馬は目が見えません、歩くことも満足にできない状態になっています。彼女たちは覚馬との再会はとても嬉しかったでしょうが、ある種の複雑さもあったのだらうと推測されます。覚馬はこのとき京都府の顧問格になっていて、京都府の復興事業の中心人物の一人として活動をしていました。目が見えなくて足が不自由でしたが、覚馬の発想と人脈が京都の近代化の復興事業に大きな力になったことは間違いありません。そういうところへ彼女たちがやって来る。

京都の文明開化

始まりは明治2年から。覚馬は明治元年に薩摩藩に囚えられ、明治2年に釈放されます。なかなかの人物であるということで新政府が登用を考えて、明治2年から3年の段階では京都府のアドバイザーとして大いに活躍をしているのです。京都府は明治2年から明治10年までの短期間に、よくもこれだけの事業を興せたなというぐらい、殖産興業・学校・文化施設・文化事業・病院というものを実に意欲的に始めています。京都勤業場というのが、明治4年2月に全部で19の事業を統括する部局として、河原町御池の長州藩邸跡に創設されました。現在は、ホテルオークラがあります。ここを中心に、化学製品・皮・牛・鉄・織物・紙・養蚕など19の事業を興しています。外国から船を買い、大型機械を買い、お雇い外国人に指導させる。次から次へと実験的工場を建てていきます。小中学校の設置は全国に先駆けています。文化施設として博物館、図書館を建てました。また、京都博覧会を開催しました。現在も続いている都をどりは、当時の京都府知事の横村正直が京都博覧会の余興として始めたものです。病院が次々に建てられていきます。資金と人を得て復興事業は意欲的に取り組まれました。そのような復興事業の中心に覚馬がいて、八重も、目が見えない、歩行も困難である兄の手伝いをしていきます。

小野組転籍事件

八重の働き方の一つの事例として、八重の証言をあげておきます。明治6年、京都の実力者横村正直が、東京で拘禁されている。それを何とか救い出そうとして覚馬は己の身の不自由さを顧みず、東京まで出かけていきます。人力車で東京まで行く兄の手助けをする。八重が語った談話です。

小野組転籍事件での東京滞在

私ノ愚兄〔山本覚馬〕八盲目デゴザイマシテ、岩倉〔具視〕サン、木戸〔孝允〕サン、江藤新平サン、アノ人達ノ所へ度々参リマシタ。兄ハ若イ時ハ二十二貫〔八二・五キログラム〕程目ガアリマシテ、其時分デハ随分重イ身体デゴザイマシタ。私ガ力ガアツタモノデスカラ、兄ガ人力車カラ降リル時ニハ、兄ヲ肩ニ掛ケテ御座敷ハ入リマシタ。水戸公ノ屋敷等、方々ハ参リマス時ニハ、イツモ御伴ヲ致シマシタコトデゴザイマス。行政裁判ガ開カレマシタノハ、兄ガ法律ヲヤカマシク云ツテ、始メテ出来タノデゴザイマス。其時岩倉サンノ御宅ヘ行キマシタ。岩倉サンハ、私ノ様ナ者ニモ極ク丁寧ニオ話ナスツテ下サイマシタ。（中略）木戸サンハ御存ジノ通りア・イフオ方デイラツシヤイマシテ、マコトニ居心地ノ良イ方デゴザイマシタガ、行キマシテイヤダト思ヒマシタノハ江藤新平サンノオ家デゴザイマシタ。誠ニ殺伐ナオ家デ、兄ヲ負ウテ廊下ヲズツト行キマスト、障子ガズツト破レテ居リマス所ニ、書生サンガ沢山居リマシタ。戦争上リノオ転婆娘デゴザイマシタガ、カウシテ兄ヲ負ウテ歩クモノデスカラ、珍ラシガツテ皆ヨク障子ノキレタ所カラ御覧ニナリマスノハイヤナ感ジノ起ルモノデゴザイマス。其ノ後佐賀ノ騒動デオセクナリニナツタ時ニ、ヨク兄ガ話シマシタ。江藤サンモトウヘ獄門ニ上グラレシマイマシタガ、イヤナオ家デゴザイマシタナト度々話シタ事デゴザイマシタ。兄ハ人ヨリ大キナ眼ヲシテ居リマシタガ、内障（そこひ）デ眼ガ見エナイカラ、人サンノ申サレル言葉ノ御様子ガワカラナイノデ、イヤナ顔ヲサレル事ハ私ガ見テ居ツテ云イマシタ。嘗テ江藤サンハオ兄サンノオ話ヲアンマリ御心ヨクオ聞キニナラナイ様デゴザイマシタト申シマス、ソウカナト云ツテ居リマシタ。

（「新島八重子刀自懷古談」昭和7年『同志社談義』第20号 同志社社史資料室2000年）

感じてほしいのは、八重が木戸孝允、岩倉具視、勝海舟、学者で有名な西周や、水戸関係の藩士など、政府の要人たちと会うという経験をしているということ。小野組転籍事件という事件が起こり、佐賀の乱で亡くなる江藤新平という司法卿と対等に議論したり、岩倉具視に建白書をさしだして、このときに政変が起こって、横村の放免を勝ち取る。このような活動に、少なからず八重も関わっていたということです。

八重の活動

八重は兄の手伝いをしながら、彼女自身、英語、聖書の勉強も始めます。明治5年、兄のツテにより、京都の復興事業のなかで、「新英学校及女紅場」の教師として勤め始める。女紅は女性の職業という意味合いで、英語を学ぶ傍ら、女性の職業訓練も行う学校でした。この学校がどのような雰囲気であったかについて、一つの証言があります。福沢諭吉が京都に学校の見学に来たときに、女紅場のことをこう言っています。

福沢諭吉「京都学校の記」明治5年5月6日

中学校の内、英学女工場と唱るものあり。英国の教師夫婦を雇ひ、夫は男子を集て英語を授け、婦人は児女を預りて、英語の外に兼て又縫針の芸を教へり。外国の婦人は一人なれども、府下の婦人にて字を知り女工に長ずる者七、八名ありて其教授を助けり。この席に出てゝ英語を学び女工を稽古する児女百三十人余、七、八歳より十三、四歳、華士族の子もあり、商工平民の娘もあり。各貧富に従て、紅粉を装ひ、衣裳を着け、其装潔くして華ならず、粗にして汚れず、言語嬌艶、容貌温和、ものいはざる者も臆する気なく、笑はざるも悦ぶ色あり。蒼の如く、玉の如く、愛すべく、貴むべく、真に児女子の風を備へて、彼の東京の女子が断髪素颜まぢだかの袴をはきて人を驚かす者と同日の論にあらざるなり。此学校は中学の内にて最も新なるものなれば、今日の有様にて生徒の学芸いまだ上達せしにはあらざれども、其温和柔順の天禀を以て朝夕英国の教師に親炙し、其学芸を伝習し其言行を聞見し、愚癡固陋の旧習を脱して独立自主の気風に浸潤することあらば、数年の後、全国無量の幸福を致すこと、今より暮して待つべきなり。

(慶応義塾『福沢諭吉全集』第20巻 岩波書店 昭和38年)

福沢が強い関心を示し、これだけの賛辞を送っている。「新英学校及女紅場」が、新進の気分たっぷりであり、そして女性がこういう学校のなかで活発に動いている情景があります。そういうところに八重を置いて考えてほしい。こういう学校に彼女は教師として勤めながら自らを位置づけていった。八重は京都の文明開化の真っ只中に過ごしていたのです。

新島襄との出会い

八重が京都にやってきたのは明治4年10月、新島襄は明治7年に日本に帰ってきて翌年4月に京都にやってまいります。この間、4年近くの歳月が流れています。この4年間に八重は英語を学び、聖書を学び、さまざまな京都の復興事業のために参与している。女学校になる女紅場で教師をやっていることを頭に置いていただきたい。そういう八重がいるところに新島という人間が登場してくる。八重と新島が出会ったときのことを記している八重の談話があります。後年の談話です。

新島襄との最初の出会い

その前から私はゴールドンさんのお宅へ、聖書を習いに行つて居りました。ゴールドンご夫婦は、病気のため京都に来て居られたので、木屋町の小さい家の座敷を借りて居られました。

或る日のこと、何時もの通りゴールドンさんのお宅へ、馬太伝を読みに参りますと、ちょうどそこへ、襄が参つて居りまして、玄関で靴を磨いて居りました。私はゴールドンさんのボーイが、ゴールドンさんの靴を磨いているのだと思いましたから、別に挨拶もしないで中に通りました。ところが暫くすると、ゴールドンさんの奥さんが「新島襄という人が来ているから紹介しましょう」と言つて、襄に会わせて下さいました。

当時私は、今の京都府立第一女学校が、まだ女紅場と言つていたその学校の舎監に奉職して居りましたので、襄は私に、いろいろと学校のことを聞きました上、ぜひ女紅場を拝観に行きたいから、都合してくれないかと頼みましたので、その旨を学校の方へ伝えておきました。

数日後、襄は女紅場の拝観に参りましたが、その時、私どもは、英人の教師から、まだリーダーを一寸教えられたばかりなのに、もうリキンスを習つて居りましたので、襄は、「よくそんなむづかしい本を習っているな」と言つて驚いて居りました。襄はそこでその英人と、いろいろと話をして帰つたようであります。

(永澤嘉巳男『新島八重子回想録』昭和3年談話 同志社大学出版部 昭和48年)

と後年になって彼女は語っています。この最初のシーンで八重が聖書を学びに宣教師の家に出入りしていたことが分かります。女紅場で、寄宿生の女性たちの取締役である舎監をしながら、彼女自身も英語を学んでいた。外国帰りの日本人青年が外国人宣教師の英学校の英人と話しこんでいる。その外国帰りの日本人青年というのが、新島襄です。文明の教育機関として新たに立ち上がった女学校のなかで、洋装の、間違いなく外国帰りの日本人青年が外国人と英語で対等に話す。そういうシーンを想像していただければいい。八重にすれば新島というのは日本の文明開化を体現した存在として、強く印象付けられただろう。彼女のさまざまな仕事も考えあわせると、文明開化のなかで新島襄という人間を認識しただろうということを、このシーンはよく語ってくれていると思われます。

ヤソ教の学校

新島が京都にやってくるのは明治8年4月5日です。そして覚馬と知り合うことによって「京都にキリスト教をもとにする学校をつくつたらどうだ」と勧められる。神戸や大阪、とりわけ大阪では最初につくろうと思つていた学校が、知事の反対でつぶれてしまった。どうしようかと考えながら京都にやって来て、覚馬を紹介され、会つて、覚馬から勧められる。神社仏閣がひしめいている京都の土地に耶蘇教の学校をつくるのはどれだけ反発を受けるか、分かっているにもかかわらず、覚馬はその学校をつくつたらどうだと勧めてくれ、襄は大変喜びます。

新島襄の人柄

今、「八重の桜」で襄を演じているのはオダギリジョーですが、私は襄を演じている彼をとて気に入っています。会津籠城戦は見ていると苦しいですが、オダギリジョーの襄はよくできているなと思います。弱々しくて、すぐ泣いて、毎週彼を見るのを楽しみにしています。新島というのは学生たちの証言によると、よく泣く人なのです。学生の前で涙をよく見せたという証言が多いのです。どこかで演説をしたとき、最初から涙声で泣きっぱなしの説教や演説があったりしたという証言もあります。学生たちからのイメージとして、新島襄という人が謹厳な、威厳に満ちたモラリストの側面が、ないわけではないでしょう。あるとき、学生が学校で問題を起こし、新島の家に相談に行くのですが、すると新島という人はとても真剣な顔になって深く悩みだした。生徒の方が、「深刻な問題は先生に話さしておこう。先生がかわいそうや」という話をしながら帰つたということもあるので、新島襄が人の言葉を真剣に受けながら、同時に自分が責任を負いながら深く悩んでいくタイプの人だということからすると、オダギリジョーはぴったりだと思います。

明治8年4月5日、京都にやってきて学校建設を勧められる。一旦、大阪、神戸に帰り、当時の宣教師団と相談して一応の了解をとりつけて、もう一度京都にやって来ます。6月末から彼は山本家に居候をします。そして、同志社英学校をつくる準備を着々と進めていく。八重と親しく知り合うようになったのは、この時期だったのでしょう。

同志社の開業

若干の経緯を言うと、8月23日に山本覚馬と新島襄と連名で同志社英学校開業願を出します。これが認可されるのが9月4日。10月15日に八重と婚約をします。11月29日、同志社が開校します。明治9年1月2日に八重は受洗します。1月3日、結婚という運びになります。同志社の開校と同時に婚約があり、1月3日の結婚に至るわけです。6月末から短期間に同志社の事業を進めながら彼女との婚約から結婚に行きつくのです。

ハーディ夫人宛書簡

ここで有名なハーディ夫人宛書簡を紹介しましょう。

ハーディ夫人宛新島襄書簡 明治8年11月23日付

I thought I might wait until she is received into church but afterward I saw a clear evidence of her conversion, and hence I became engaged to her without a least hesitation. She is not yet baptized by water, still I trust she is already baptized by the Spirit.

Soon after the occurrence of this happy event, she was discharged from a female school sustained by the Kiyoto Government where she has been a teacher for four years. It was done by the Governor's own decision without consulting the officers of the school because he feared if she should teach Christian religion in the school all pupils would certainly leave off it. She is somewhat like her own blind brother. She is afraid of nobody when she is convinced that it is her duty to do certain things. She has often appeared before the Governor for getting some grant for that school whilst the officers of it were afraid to say to him. Since she became Christian she often spoke of the truth in the school, and moreover her recent engagement to a Christian man excited the fear of the Governor. She was very suddenly discharged from her school but was not sorry at all. She was saying another day "it is all right, hereafter I will get more time to study the Gospel truth."

I enclose her likeness which was taken only a few days ago. As you will soon see it, I hope you will give me some criticism of her. Of course she is not handsome at all. But what I know of her is that she is a person who does handsome. It is just enough for me.

(新島襄全集編集委員会『新島襄全集6』同朋舎出版 1985年)

新島を約10年間にわたって全面的に援助してくれたハーディの奥さんにあたります。新島が本当に敬愛してやまなかったハーディ夫人宛の書簡を読むと、その人の子どもであるかのように強い敬愛の気持ちをもっていることが分かります。書簡というのは相手との関係が大きく出ます。ハーディ夫人宛の書簡も新島の気持ちが強く出ているものだと思います。その一節に八重の「ハンサムウーマン」というキャッチフレーズのもとになった言葉が出てきます。最後の節に「数日前にとつた彼女の写真を同封いたします。あなたがそれを見て、いづれ彼女についていろいろと意見を言っていた下さると思います。もちろん彼女は全くハンサムではありません」と。その後、「だけど私は彼女がハンサムな生き方をする人であることを知っています。私はそれで十分です」という文面です。ここに出てくる「ハンサム」という言葉、この一カ所だけですが、これが「ハンサムウーマン」というキャッチフレーズになっていますが、そのもとになった書簡です。さらに、こういうことも言っています。「彼女はいまだクリスチャンではありませんが、回心の証を見えています」。婚約の報告をしているのですが、婚約しているときには、まだクリスチャンではありません。「彼女の回心の証を見えていますし、神の祝福を受けた人間と同じです」と書いている。彼女は襄との婚約によって4年間勤めた女学校の教師の職を解任されます。彼女は女学校の教師の職をクビになります。榎村あたりが「ヤソ教の信者がこの学校でキリスト教を教えるようになったら大きな問題になるからこんな教師はおつてもらつたら困る」と言つたのかもしれませんが、11月18日に八重はクビになるのです。「そこである日、彼女に聞いたところ、そんなことは全くかわないですよと答えた。おかげでこれからは福音の真理を学ぶ時間がもっともてます」と彼女は言うのです。それで最後に「彼女はハンサムではないけれども、ハンサムな行いをする

人だ」と続くわけです。彼女は自分が確かだと確信をもったことに対しては意思を表示し、そして行動に移します。そのような人です。時の権力者である榎村正直のもとに押しかけて
いて、誰もおじけづいて権力者にものを言わないのに、彼女はそこにでかけて行ってものを申した、直言をしたということ、この手紙のなかに書いている。新島は「意思をきち
つと伝え、表現をし、行動に移すという女性」として八重を認知していたことは間違いないだろうと思われます。開業願から始まり、慌ただしいなかで、二人の結婚。彼がどうい
う認知を与えて八重を受入れたかを、この手紙のなかでたどることができます。

2つの価値観

青春というときに、一応、結婚というのが青春のゴールだとするならば、ここで八重の青春は一応のゴールに到達したと言えるだろうと思います。今日の話は会津の籠城戦と京都の
文明開化。会津という地方都市から京都という千年の都へやって来る。彼女の精神の運動を問題にしようとしているわけですが、会津は地方都市、籠城。京都は都で文明開化。彼女は
会津武士の節義というモラルを24歳まで身につけていきます。彼女がゴールした明治9年1月の段階でキリスト教に入信をする。この二つの経験、そこから出てくる価値観はずいぶん
のちがひがあります。江戸時代と近代、会津は近世の価値で動いている。新しい近代の価値では動いていない。ここで目立つのは会津武士たちの武道、京都は文明の地です。会津では
彼女は死を覚悟した。京都での文明開化は、どれだけ活発に生きられるかという価値軸がある。さらには武士道とキリスト教、この大きな落差を彼女はどのように精神的に生きたの
か。大きな落差があります。言いたいことは簡単で、彼女は京都の文明開化に批判的なスタンスは全くとっていない。彼女はこの世界に飛び込んでくる。何らかの躊躇があったとは見
えない。彼女の語りからみると、この大きな落差のなかに彼女の青春があるということなのです。この二つの世界を、少なくとも彼女は両立できるということ。後世の人間からすると
矛盾し、価値軸が違うものが並び、それが共存している。八重のキリスト教信仰が、どうも徹底しないとと言われることがあると言われたりしますが、しかし、この二つの異なる価値軸
を、少なくとも主体的に彼女は生きたということだけは確かです。そういう人をどう考えるかということが、八重像というものに結びつきます。会津と京都、全く正反対のものとして
考えることはありえることですが、共存するということよりも、八重の場合、この二つが矛盾するものであっても、両方を主体的に担って、落差を落差として、落差を一つのエネルギ
ーにして彼女は生きていった女性のように思います。落差をエネルギーにする、人生に段差が生じたとき、新政府軍によって命を奪われた会津藩の人たちが、たくさんいるわけです。
この死者の声を明治に生き残った会津人たちは考えざるを得ない。そういう人間からすると八重のように生きるのは難しい場合がある。当時の政府要人の間を駆け回ることができる
人、政府要人になった連中は会津の家族を殺した張本人だ。会津戦争での死者の声を背負って近代を生きた会津人にとって、八重のようにこんなに鮮やかに生きられるだろうか。でも、
このような彼女の経験のあり方とモラルに対して、彼女のもっている質が問われなければならない。恨み節はずっと会津には残っています。現在でもそうです。会津人がもってい
る、中央の人間によって虐げられてきたという怨念を、現在の人も、どこかでもっている。会津というのは戦前だろうが、戦後であろうが、ずっとそういうものをもち続けながら生き
てきた。それを八重に当てはめるとき、八重の動き、働き、これは一体何であるのか。こういうことを忘れてしまった如きといいますが、私は八重という人のモラル、経験した内実を
徹底的に考えなければいけないと思う。実はこの両方ともに彼女は感動するのです。こういう彼女をどのように考えたらいいかというのが八重像のポイントです。新しい世界へ入り込
んでいき活動する。正反対の世界に飛び込んだ自分を、それほど意識したわけではないだろうと思います。

青春とは

青春とは自分がどう動いていったかは後から思うものであります。青春を実際に生きているなかでは、そんなに自覚的ではない、八重が後年、どう考えるか。多くの生き残った会津
人たちは新政府に対して恨み節を残しています。でも八重や覚馬という人間は、会津に敵対した連中に対して批判がましいことを言葉としては残していない。これはなぜか。この二人
は会津に対する思いがなかったのか。そんなことはない。会津に対する思いの質を考えないと、覚馬や八重という人間は分からないだろうと思われます。とりわけ新しい世界へ飛び込
んでいったときの八重の活動、敢闘精神をどう考えるかということが、八重像につながるものだろうと思っています。
諸君たちも八重とあまりかわらない年齢を生きているわけです。青春のさなか、人生をそれほど自覚的に生きているわけではない。翻って自分の気持ち、そのとき、どうであつた
か、どんなときに一番心が動いたかを後世に考えるとき、初めて青春というものが見えてくる。そのど真ん中にいるときはあまり考えない。このとき、おそらくそれほど自覚的ではな
いにしろ、正直な自分であるというのは青春時代の特徴ではないだろうか。中年になってくると理屈っぽくなり、いろいろ考えすぎる。青春というのは自覚は少ないかもしれないが、
そのなかにいた自分を疑わない人生の期間のように思われます。誰だって、そうなんです。矛盾するというのは後世の人がつけた理屈であります。そうではなく、どうやって活発に両
方とも動くか。彼女は両方とも捨てません。これはどういうことなのかを考えたときに八重という人間が少しは我々のところに近づいてくるのではないかとと思っています。以上、「八
重の青春」と題しましてお話をさせていただきました。終わらせていただきます。